

盆踊り漫遊

竹中尚文

第8回 第2次世界大戦と強制収容

5. キャンプ

第7回の連載と重なることがあるかと思いますが、わかりやすくお話をしたいと思います。

1942年(昭和17年)2月20日 デウィット将軍は日系人の強制収容の実施責任者に就任しました。

1942年3月24日 デウィットは日系人の西海岸からの退去命令をだしました。

1942年3月31日～8月7日 カリフォルニア州・オレゴン州・ワシントン州で日系人すべてが集合センターに集まるように命令がでました。町のいたる所に集合を命ずる張り紙があったそうです。集合の準備期間には6日ほどだったそうです。持ち物は携行可能なものに限られました。多くの人が手提げトランクひとつで集められました。靴に入りきらないものは売り払ったそうです。「ブランケ担ぎ」(「盆踊り漫遊」第6回『対人援助学マガジン』第37号に記述)から始まって一所懸命に働いているんな物を手に入れて、そのほ

とんどを限られた時間で処分しなければならなかったのです。状況をみた人たちから安値を提示されて、捨てることにした物もあったようです。情けない思いだったでしょう。

この状況を聞くうちに、ある人が阿弥陀さまを靴に入れていたとおっしゃいました。当時、日系人の半数は仏教徒でした。そのほとんど人が、靴に仏壇からはずした阿弥陀さまと位牌を入れていたそうです。彼らは特別の仏教徒でもなく、普通の仏教徒なのです。彼らにはそれがあたりまえのことでした。今の日本で暮らす仏教徒と明らかに異なる行爲です。

とにかく、彼らは集合センター(文章末の地図の○印 Assembly Centers)に収容されました。集合センターといっても元々そのような場所があったわけでもなく、競馬場の厩舎や農業市場の家畜小屋などを改装した物でした。そこで100日前後すごしてから、日系人を太平洋沿岸部に置いておくことは危険だという主張により、日系人は内陸部に

送られたのです。

彼らが送られたのは 2 種類のキャンプでした。ひとつは再定住センターであり、もう一方は抑留収容所でした。

地図上で■印で表される所が、再定住センターと呼ばれるところです。ほとんどの日系人が再定住センターrelocation centers に収容されました。私が出会った多くの人が、「トゥーリレイク(カリフォルニア州)だった」とか「ポストン(アリゾナ州)だった」とか「ギラリバー(アリゾナ州)だった」と聞きました。●印の所は司法省の抑留収容所でした。“internment camp”をどう訳すか悩みました。たぶん「捕虜収容所」と訳すのでしょうが、日系人は捕虜ではありません。一方、ノースダコタ州のビスマルクにはドイツ人やイタリア人捕虜も収容されていたそうです。仏教の開教使の多くは抑留収容所としてのニューメキシコ州のサンタフェやテキサス州のクリスタルシティに送られました。先に紹介した松浦師(「盆踊り漫遊」第7回『対人援助学マガジン』第39号に記述)はビスマルクに送られました。

ここまで、私は日系人と記しました。実際は日本人及び日系米人です。当時の張り紙には「日本人及び日本人を先祖に有する者」と書かれていました。具体的には日系移民一世と二世でした。一世は日本人です。前に記し

たように日本人はアメリカ国籍を取れなかったのです。しかし、二世はアメリカで生まれたのですからアメリカ国籍になります。日系米人です。この行為はアメリカ人の自由を違法に奪ったのです。その主導者たちも違法行為であると分かっていたからこのような表記になったのかもしれませんが。

ここに収容されたのはアメリカ合衆国本土の前記三州に住む日系人でした。他に日系人が多く住むハワイの日系人は強制収容されなかったのです。その理由は収容責任者デウィットが本土西海岸の司令官であったからです。ハワイにはエモンズが司令官としてハワイの国防を担当していました。彼はハワイの人口の3分の1を占める日系人を収容することが現実的ではなく、日系人の存在が国防の妨げにならない上、社会に必要な存在であるといって日系人の強制収容をおこないませんでした。そうすると本土の日系人強制収容はデウィット将軍ひとりの考えによるものかと思われませんが、そうではありません。当時の大統領であるルーズベルトの決断でもありました。当時、FBI 長官フーヴァーは大統領に日系人の反国家的行動の恐れはないと強制収容に反対をしました。また、アイゼンハワーをはじめとする多くの軍人も日系人強制収容は不要な行為であると反対しました。私は日系人強制収容の主因はルー

ズベルトとデウィットの人種偏見であると思います。

6. 忠誠登録審査

1943年(昭和18年)2月 強制収容が始まって半年から一年が過ぎた頃でした。収容所の日系人に対して忠誠を問う質問状が配布されました。それは、戦争を遂行している時に兵士になり得る若者を閉じ込めておくことの無駄を指摘する意見が強くなったからです。こうした声は軍部から出るようになりました。一方で、収容所の中の日系人の若者からも兵士として働きたいという声があったそうです。また、合衆国議会で日系人を収容して無料の食事を提供していることに批判する意見があったと言います。

日系人の志願兵を募集するにあたり、日系人の忠誠心を調査することになりました。そして42項目からなる質問状が収容所で配布されました。その中の第27番目と第28番目の質問が問題となりました。

第27項目「あなたは合衆国軍で、命令されるいかなる所でも、戦闘任務につく意志がありますか？」

第28項目「あなたはアメリカ合衆国に対して無条件に忠誠を誓い、すべての合衆国内外からの攻撃に防衛し、日本の天皇やいかなる

外国政府や機関に忠実であったり従順であったりしませんか？」

この二つの質問に多くの日系人は憤りを感じたものでした。一世に対してはアメリカ合衆国の国籍取得を拒絶し、アメリカ国籍を有する二世には不法に拘禁したうえ、何があってもアメリカ合衆国に対して忠誠を誓うか、アメリカ合衆国のために命を捨てる覚悟があるかという質問でした。この質問は日系人に強い理不尽さを感じさせるものでした。

人間としての誇りを優先した人は「ノー」と答えました。日系人の将来を考えた人は「イエス」と答えました。

イエスと答えた若者は収容所から出征して行きました。彼らは日系人ばかりの第442連隊戦闘団としてヨーロッパ戦線に投入されました。この戦闘団はアメリカ軍史上、最も多くの勲章を受けました。同時に最も高い死傷率を記録しています。また、ハワイ出身の日系人を中心に編成された第100大隊も同様の働きがあったと記録されています。ところで、日本軍の特攻隊を狂気の戦術といえます。日系二世の兵士たちは精神的退路を断たれた中で、激戦地に投入されたのです。日本軍の特攻隊とどれ程の違いがあるのでしょうか。出征した二世の多くは勲章という変わり果てた姿となって親元に帰ってきたのです。一世の親たちはどんな気持ちだったでし

よう。夢を見てアメリカに渡り、苦勞を重ねた結果が息子の戦死だったのです。それは、日本の特攻隊の親たちにも同様の悲しみがあったように思います。

ノーと答えた人たちはイエスと答えた人たちに対して、明らかに少数でした。彼らは「ノーノーボーイズ」と呼ばれアメリカ政府に対して反対の意思を表明する行動をとりました。収容所内のデモをし、収容所の管理に反抗していきます。そうした彼らは、もともとノーノーボーイズが多かったトゥーリレイクに集められました。そこでの反政府運動を続ける者たちは、さらに司法省管轄の抑留収容所に送られています。さらにはアメリカ国籍を捨てる者もいました。前回で紹介した映画『愛と哀しみの旅路』(Come See the Paradise)で、カワムラ家の息子チャーリーは、ノーノーボーイとなって捕虜交換で日本に渡ります。実際に戦中でしたので、捕虜交換で日本に渡った日系人は少数だったようです。多くは終戦後に日本に渡った人たちです。また、戦前に排日運動の高まるアメリカ社会の中より日本で教育を受けさせようと考えた一世は、子どもたちを日本の郷里に送った人もいます。その多くは上手くいかなかったようです。一世にとっては自分たちが育った日本で教育を受けさせた方がいいと思っただけですが、軍国教育の日本にアメリカ

で育った二世を送ったわけです。その多くが再びアメリカに戻っています。こうした人たちのことを「帰米二世」と呼びます。彼らは日本社会でもなじめず、再び戻ったアメリカの社会でもなじむのに大変苦勞をした人たちです。私は、アメリカで何人かの「帰米二世」の人たちに会いました。その話を聞かせてほしいと頼むと、即座に拒否されました。彼らには思い出したくない苦しい過去です。

話を忠誠登録審査に戻しましょう。この審査を経て、アメリカの日系人強制収容政策は変化します。第一には、第 442 部隊のように兵士となって収容所から出たことです。デウィット将軍の強い反対にもかかわらず日系人部隊は編成されました。そして、その部隊の戦果は全米の知るところとなります。とても大きな代償を払った日系人への見方が少し変わりました。第二には、イエスと答えた若い女性を労働者として東部で使い始めました。戦争を遂行するアメリカ社会は労働者不足でした。この労働力を補うことと、若い日系人が収容所をでるという思惑が一致したのでした。

1943 年 9 月に、デウィット将軍は日系人強制収容の任を解かれています。しかし、強制収容所が閉鎖されるのはもう少し時間がかかりました。ジェローム(アーカンサス州)が 1944 年に閉鎖されましたが、ほとん

どの収容所は終戦の 1945 年の秋でした。ツウーリレイクの閉鎖は 1946 年まで待たねばなりませんでした。

7. 声

私が 2000 年に日系人二世の人たちに聞き取りをした声を紹介します。この年は、早く聞き取りをしないと当時のことを知っているひと(日系二世)がいなくなってしまうとアドバイスを受けたからです。2000 年に、二世の人たちは 70 歳から 100 歳ほどでした。

Yさん(1922年ハワイ生まれ。二世)

真珠湾攻撃のあった日は、クリスマスの準備の買い物でホノルルの赤十字病院のすぐ隣にいました。急に負傷者が運び込まれてくるのを病院で友だちと一緒に手伝っていました。気がつけば日も暮れて、自宅に帰るバスが戦争勃発のために運休になっているのを知りませんでした。通りかかった白人が友人と一緒に自宅近くまで同乗させてくれました。初対面の人が日系人の私を乗せてくれたことに、あとになって驚きました。家に着くと、電灯も点けず真っ暗でした。電灯で部屋の中を明るくしていると、誰かに銃弾を撃ち込まれるのを恐れてのことでした。そうし

た心配はしばらくのことで、ハワイでは日系人に対する差別をあまり感じませんでした。その後、兄が出征して 442 部隊に配属になり、弟も出征して MIS(陸軍情報部：語学の得意な者を集めて、日本軍の無線傍受や捕虜の尋問などをしました。終戦後、日本の統治にアメリカ軍が進駐したときに、日本との接点になったのも彼らでした)に配属されました。開戦前に高校を卒業したのですが、私はハワイを出て都会で働きたいと希望していました。家族から二人も出征している状況で、家を離れることはできませんでした。ある日、軍のジープがわが家に向かってやって来ました。父親は、きっと 442 部隊の兄が戦死をしたことを知らせに来たと思いました。普段は厳格でしっかりした父親がしゃべれなくなりました。軍の用件は、わが家で飼っている犬を軍用犬として提供してほしいということでした。父は、即座に「どうぞ、どうぞ。犬でよければ、いくらでも」といいました。

終戦後、兄と弟は無事に帰ってきました。そして、私は都会で働きたいと思っていたのでニューヨークに行きました。ニューヨークには母の妹が住んでいたため、叔母を頼りに行きました。ニューヨークでは、東京銀行に就職しました。終戦後間もない頃、日系人に一般の就職のチャンスはありませんでした。

私はタイプライターを打って書類を作る仕事を中心でした。私のボスは小野さんといって、長女のヨーコちゃんが有名になりました。

その頃、私はヨーロッパ戦線から帰国した主人に会いました。彼は 442 部隊ではなかったのですが、ヨーロッパから帰国してお姉さんのいるニューヨークに帰ってきました。彼は、もちろん日系人ですよ。私たち二世は日系人以外と結婚をするなんて、一世の親は許しませんでしたよ。でも私の子どもたちは、誰も日系人と結婚した子はいないわよ。私の友だちもみんなそうですよ。

主人と結婚して、主人の故郷であるカリフォルニア州に引っ越しました。1953 年でした。50 年代になると、カリフォルニア州の人たちは誰も日系人に差別をしませんでした。それまでは、カリフォルニアが一番、日系人に対する差別はきつかったのです。40 年代は日系人を雇う会社はほとんどなかったけど、50 年代になるとどの会社も差別なく雇ってくれました。

センヨウ・ササキ師（1930 年、カリフォルニア州生まれ。浄土真宗開教使）

祖父が本願寺からの開教使としてカナダに渡りました。祖父は、祖母と幼い父を連れての開教でした。父もアメリカで開教使になりました。（アメリカでは三代にわたって僧職

につくケースは大変珍しい）

父は sacrament (カリフォルニア州) の仏教会の僧侶でした。戦争が始まって、父は FBI に逮捕されました。父を含めて、私たち家族はトゥーリレイクに収容されました。ほとんどの開教使、たぶん全開教使が逮捕されました。そのまま司法省の特別のキャンプに入れられた開教使と家族と同じ一般的なキャンプに収容された開教使がいました。この違いがなぜなのか、私は子どもだったので分かりません。たぶん、本人たちも分からなかったと思います。しかし、トゥーリレイクに入れられた父は「イヌ」と呼ばれたこともあります。

トゥーリレイクでは反米的な人が多かったし、他のキャンプからも反米的な人が移されてきました。そんな人たちは仏教徒が多かったように思います。だから、キャンプでも父を中心に日曜日のお参りをしたり、法事をしたりしました。お葬式もしましたよ。フェンスの所で射殺される人もいましたので、その人のお葬式を父がしていました。私たちは戦争が終わるまで、トゥーリレイクにいました。

匿名さん(1930 年カリフォルニア州生まれ。父が一世、母が二世)

父が浄土真宗の開教使だったので、戦争が

始まるとすぐにFBIに逮捕されて、サンタフェ（ニューメキシコ州、抑留収容所）に送られました※。私たちの家族のいるキャンプに合流したのは1944年10月でした。やっと家族4人が一緒になれたといっても、弟と私と両親の家族ですね、戦争はそれから間もなく終わりました。キャンプを出てから、日本に帰りたい人は帰ってもいいというので、日本に行く船が出ることになりました。父は自分の生まれた滋賀県のお寺が心配でした。戦争前におじいちゃんが亡くなって、おばあちゃん一人になっていたはずなので、心配して日本に帰ることにしました。私たち家族全員で日本に帰ることにしましたが、日本に帰る人はそんなに多くなかったと思います。

船は1945年12月25日に横須賀の浦賀に着きました。浦賀には、いろんな国から日本に帰ってきた人たちがいました。私たちはアメリカから帰ったのでそんなに栄養状態も悪くありませんでした。中には、やせ衰えて上陸するとすぐに亡くなる人もいました。浦賀に帰国者収容施設のような建物があって、その中でも亡くなる人もずいぶんありました。余りにもたくさんの方が亡くなるので、建物の横に寝かせてありました。

私たちは、アメリカのキャンプでずいぶんとひどい目にあったと思っていましたが、もっと大変な目にあった人たちがたくさんい

ました。

私たちは滋賀県の行くために大船まで歩きました。大船駅で列車に乗ろうと思っても、余りにたくさんの人なので何度も乗れませんでした。何度か横須賀から大船まで歩いて、ようやく列車に乗れました。米原で降りて、ちいさな列車に乗り換えて父の生まれた町に到着しました。お寺に着いたのは1月1日でした。私たちを見たおばあちゃんは、言葉もなく立ち尽くしていました。戦争中は手紙もやり取りができずに、おばあちゃんはお寺を守っていたのです。

私は滋賀県で高校に行きましたが、日本の生活になじめませんでした。私は早くアメリカに戻りたかったのですが、母が高校を卒業するまではアメリカに帰ってはならないと言いました。高校を卒業して、やっと母方の祖父母がいるサリナス(カリフォルニア州)に帰ってきました。その2年後には弟が高校を卒業して帰ってきました。両親はそれから数年後にアメリカに帰ってきました。

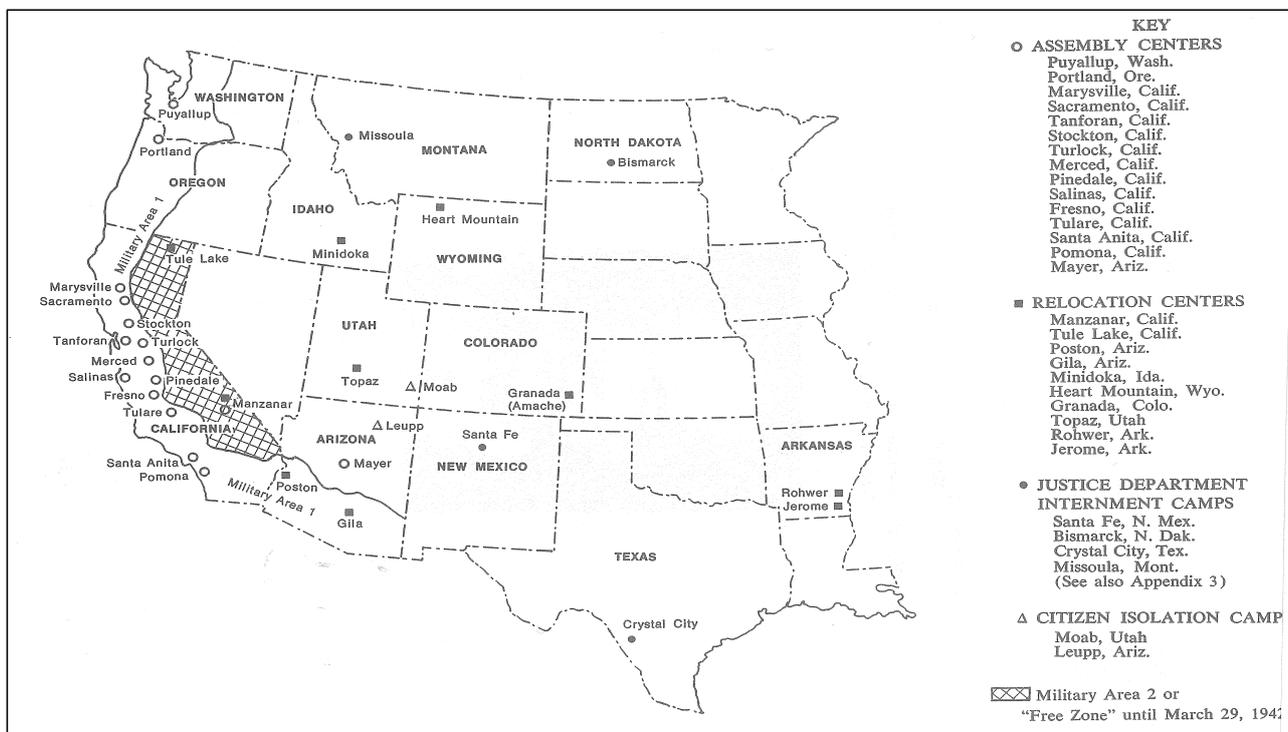
※インタビューの後で私は彼女の父親の開教使記録を調べました。彼女の父親はサンタフェからテキサス州のクリスタルシティーに送られていました。開戦の直前に一年余りの間、日本に帰国したのが理由かもしれません。それはおそらく父親の死去ともなうことではなかったかと想像できますが、それが疑われて長期間、それも2ヶ所の抑留収容所に入

られたのではないかと思います。

私は、カリフォルニア州で収容所の話を聞いて回った頃には一世は亡くなっていて、二世の話すら十分に聞いていません。はじめは一世の話を聞きたかったのですが、それは不可能でした。かつて一世のこんな話を聞いたのが、私の日系人の歩みに関心をもつ始まりでした。それは、多くの一世が収容所を出て、太平洋を眺めながら異口同音にいった言葉です。

「太陽が太平洋の西の彼方に沈んでいく。西の彼方に私の故郷がある。アメリカに渡って一旗揚げて故郷に帰るのが夢だった。キャンプに入れられて無一文になった。もう自分の人生は最晩年である。故郷に錦を飾ることなどできない。戦争中、日本に残してきた親や兄弟の安否すら分からない。極楽浄土は西の彼方にあるそうだ。西に沈む夕日に手を合わすだけだった」

全米の収容所の配置図



“YEARS OF INFAMY” Michi Weglyn 1976 より引用